桑山河

第18号

平成17年5月15日
発　行
社団法人 沼津牧水会

目　次

影とし吾は　2
日本ほろよい学会　8
第51回 沼津牧水祭
　碑前祭・芝酒盛　10
　短歌大会　11
第17回 雛の歌会　12
文化講座　13
サロン音楽の夕べ　14
平成16年度事業報告　15
定款・編集後記　16

影とし吾は
――若山喜志子の自立と牧水

小高賢

伊藤整『日本文壇史』第十五巻の第一章、第二章は『女子文壇』を背景にした詩人・横瀬夜雨が中心人物である。『女子文壇』はよく知られているように、明治三十年代から大正初期にかけて、女性を対象にした投稿文芸雑誌で、河井酔茗が長く編集責任を務めた。文学史などによれば、江見水蔭、川上眉山、徳田秋声、泉鏡花、永井荷風などの大家も選者を務めたという。

『女子文壇』
（茨城県下妻市ふるさと博物館提供）

投稿者のなかでは杉浦翠子、山田くに子、三ケ島葭子、太田喜志子、水野仙子、三宅やす子、鷹野つぎ、島本久恵などがいる。

伊藤がとりあげているのは詩の選者である横瀬夜雨と、それをとりまく女性たちの関係である。身体の不自由な夜雨が「我身の不具を悲しみ訴え、自分のために妻となって、子を産んでくれと訴え」る詩を発表した。その結果、三人の女性から熱烈なる手紙をもらうことになる。そのひとりが山田くに子、のちの歌人・今井邦子である。その事件の詳細は大変興味深いが、本稿と特別関係がないので省略するが、伊藤整はこんなことをいっている。

明治四十年代の田舎の少女たちは、出版物に載る文芸作品によってロマンティックな夢想を育てふくらましたが、現実には手紙による外に男女交際の機会がなく、独立の生活をする方便もなく、父母の古風な生活の絆を離れることは容易でなかった。

若山牧水とのちに一緒になった太田喜志子もそのようなひとりであった。

きりぎりすその生れたるそだちたるほしいままもて恋もすべけれ
わが髪の千すぢことごと落葉貫きまきてかざして死なむとぞ思ふ
生ひ立ちし家の暗さのいとはしく遺書もせし雪ふりつむ夜
大方の若き男子の恐ろしさ見えぬ君故兄とよびけり
何ごとも夢にありけんつかのまに夢となりけん彼の唇づけは
家出してかへるに本意なさ面はゆさ木にも水にも鳥ないてをり
十日して家にかへれば青々とわが白足袋になやましき野路
桔梗ケ原わが海恋の眼になれてその蒼暗く遠き松原

これは第一歌集『無花果』の最後に付された「桔梗ケ原」の作品である。牧水と出会う前の喜志子の状況がほのみえる。十五歳のとき、教師から高等女学校への進学を勧められたが、女に学問はいらないと父親に反対されて断念する。それは彼女の終生の悔いになった。女性は早く嫁にいけばいいのだというのは、当時の当たり前の意見であったが、自我の拡張を願った女性には、いたたまれない環境だった。そこをどのように抜け出るか。と

りわけ地方の多くの若い女性の前に立ち塞がっていた壁は厚かった。

『女子文壇』に投稿する文学少女たちは夜雨の恋人をよそおい、夢見、あるいは妹分になることを口実に、上京しようとしていた。若山喜志子研究家の樋口昌訓によれば、外の女性にくらべ、女性としての魅力という点で夜雨の気をひけないことは十分に知っていたが、喜志子も同じ思いを強くもっていたという。

なんとかして、自分の現在から逃れようとしていた。十日ほどの家出という作品はそういう煩悶を示している。作品にあらわれている死、暗い、遺書ということばは喜志子の当時の心理状態をあらわしているだろう。

牧水と結婚したあと刊行した歌集の最後に、これらの一連を遺していることは、喜志子にとって忘れ得ない原点がどこにあるかをはっきり示している。第三歌集『筑摩野』においても改作、修正をほどこしながら、やはり『桔梗ケ原』の一連を収録している。それほどにまで喜志子にとっては重い記憶なのである。『若山喜志子全歌集』の年譜によれば、彼女は明治四十一、二年頃(二十一、二歳)は、『女子文壇』の花形として、全国の投書仲間から盛んに手紙をもらうようになったとある。またライバルでもある今井邦子が文学修行の志を立て、諏訪から上京する。赤彦から「アララギ」への参加を喜志子は奨められる。おそらくそこに自信も生まれたであろう。二十四歳のとき姉の病気見舞いに行き、そのまま上京、一時太田水穂の家に身を寄せる。そこではじめて、若山牧水に会うのである。

喜志子が下宿した森本酒店

ひとりで新宿二丁目の酒店の二階に下宿。遊女の着物などを縫い自活する。当時のそのあたりの風俗のことを思えば、喜志子の自立の思い、文学への憧憬の強さ、意思の強さを改めて確認せざるをえない。

翌年、一度故郷に戻る。そこで当地を訪れた牧水から結婚を申し込まれる。牧水の再三の慫慂(しょうよう)により、両親に無断で上京。再び酒店の二階に戻る。そこで結婚生活がはじまるのである。明治四十五年五月のことであった。

ところが、七月下旬、牧水が父危篤ということで、宮崎に帰り、翌年、六月まで戻ってこない(この間の進退窮まった牧水の煩悶は第四歌集『みなかみ』の破調作品に色濃く残っている)。しかし、彼女はすでに長男旅人を身ごもっている。このままでは正式な結婚すら危ぶまれる。当時の常識では世間の非難を浴びるような新婚生活である。しかし、結局、喜志子は実家に戻り、そこで出産せざるをえない。いわば、故郷を捨てて出奔したのに、ふたたび実家に世話にならざるをえなかったのである。どれほど悲惨な気持ちを抱いたか、想像に難くない。

引用するスペースがないが、『若山牧水全集』には喜志子の兄稲雄に宛てた牧水の恐縮しきった手紙がある。当時は、非常識を押し通さなければ文学などできなかったということかもしれないが、牧水の生き方はまわりから見れば危なくて仕方がなかっただろう。

長男旅人が私生児になる可能性も、一時はありえたという。結局、すべてに合意がえられ、なんとか両方の家から承認される。いい

かえれば喜志子の熱意に、信濃の実家が根負けしたということもいえるのだろう。

第一歌集『海の声』に示されている園田小枝子との恋の痛手にうちひしがれていた牧水。是が非でも上京し、文学によって自分を生かしたい喜志子。二人の恋愛はある意味において、双方に「打算」がなかったとはいいにくいところがある。つまり両者の利害は合致している。そのことはおそらく牧水も喜志子も分かっていたのであろう。もちろん恋愛感情を否定するわけではない。ただ、歴史とは無残なもので、巷間いわれる純粋な恋愛の裏側を想像してしまうのである。

長男 旅人を抱く牧水と喜志子

では、結婚によって喜志子の願望はある程度達したのであろうか。彼女は牧水の亡くなるまで三冊の歌集を上梓している。第一歌集『無花果』、第二歌集は牧水との合同歌集の『白梅集』、第三歌集『筑摩野』である。その作品を見てみると、その色調は「桔梗ケ原」とそんなに変わらない。なぜなのだろうか。

作品を少し引用してみる。

波にのがれてゆく舟かもよ淋しとてさびしとて日頃物言はぬわれ
われぞいたましわれぞいたましいたましと思ひつづけて起ち居するかな
にこやかに酒煮ることが女らしきつとめかわれにさびしき夕ぐれ
しみじみと物も語らず君は君のなやみまもるかせむすべもなし
何か為さねばをられず身うちじりじりとなやましさのみもゆることかな
なげきつつ君にすがらばわがなべてはよみがへるかといのるが如し
わが恋はゆくて知らずて母となりぬわびしいかなや若き魂
ただありてさへ燃ゆる心のわびしさを身におきかねて友訪ひにゆく
ほとばしれほとばしれとの心一すぢ乗れる電車に身を揺りつぐむ
人に添ひはじめて冬を迎ふる身の心細くもかく家居する
友はみなかがやきてあらむ桜咲くとすこやかの身をなほもそめつつ

『無花果』から少々多めに引用してみたが、ここには結婚した喜びはどこにも見られない。あるのは焦燥感だけである。あれほど願望した都会での生活なのにと、誰しもが思うだろう。さびしさ、かなしさ、憂い、怒りといった言葉が頻出する。「じりじりと」「なげきつつ」「わびしい」「心細く」という気分。歌集全編がこのようなトーンに塗りこまれている。「いたましいたまし」「ほとばしれほとばしれ」というくりかえしは自分も含めた周りへの呪詛かもしれない。男の酒を準備することだけが私なのか。そうではないだろう。そして母になってしまった。友人はかがやいて見える。といって後戻りはできない。そのような自問自答の日々が想像できる。

作品から見えてくることは、女性が近代に置かれていた立場を、牧水との生活のなかで再び実感しなければならなかった喜志子の苦しさ、かなしさである。娘としても親の不当な扱いに苦しんでいた。しかし、妻となってもそれほど大きな違いがないことに愕然としたのではないだろうか。

一方、牧水はどのように思っていたのだろうか。正直いえば、喜志子の苦しみをそれほど分かっていたとは思えない。もちろん、彼は彼としての実存に苦しんでいたところがあ

る。窪田空穂のエッセイにこんなエピソードある。「なぜさう酒を飲むのだ」と牧水に聞いたところ、「そんなことは言つてくれるな、朝、目が覚めると、何うにも寂しくてたまらない、少し飲むと、やうやう普通の心持になれるのだから」といったという（「若山君について思ふこと」）（『創作』「若山牧水追悼号」）。

真偽は定かではないが、牧水のなかにいいえぬ苦しさがあったことは事実であろう。それでなければ、あのような異常ともいえる旅の連続。それと酒に淫することは想像ができないからだ。

何かしらねどさびしげに家を出でてゆき
し君故今日のなやましきことよ
遊びほれ帰らぬ人を待つ心憤怒は来りよ
ろはんとする
ふとたふれて死ぬるか夫よ先ほどのもの
憂き顔は黒き針かも
酔うてかへり物も語らず朝となれば陽に
いそしまれ君幾世ふる
わびしとて泣かむに君は酔ひてあり何に
よすべきわがかごとぞも
うらみわびただ一すぢに君をこそ恃める
ものを何か足らはね
わが好む広き額を何ごとぞかきくもらせ
てしづみ給ふは

こういういいかたは論理的ではないかもしれないが、このような作品に近代の女性の耐え方がよく出ている気がする。妻の苦しさを分かっているのか、分かっていないのか判然としないが、作品上からは牧水が妻を慮っているとはどうしても思えない。恨み、怒りが募っているのだが、喜志子は逆に牧水の心中を思い、気遣ってしまう。

『無　花　果』

一首目のようにさびしげに家を出る夫が気になって仕方がない。といいながら一方で、「友はみなかがやきてあらむ」とも想像する。このダブルバインド。夫の憂い顔は心配になる。そうはいいつつ、このままではいけないとも思う。「いとせめて植物園に秋草を見にゆかんとて帯をしぞ縫ふ」と思い直す。前向きに生き抜こうと思い直す。

おそらくそこには、「桔梗ケ原」という原点が浮かんでくるのだろう。家出をし、反対を押し切り、上京してきた自分を信じる以外道はない。まさに健気としかいいようがない姿勢である。喜志子のこのような作品は当時の読者には、自分のことのように響いたのではないだろうか。

そのなかでの唯一の救いが子どもになってくる。それもいわゆる女性が辿る一般的方向なのかもしれないが、そこにしか頼るところがないことも事実である。

児に乳をふくまする時ふとも来てあとか
たもなくきえゆく愁
いやはてのなげきのはてに吾子のかほ小
さく見えて睡りゐるなり
赤い入日赤い入日とさりげなく背の子ゆ
すぶりかへる草原
このもの憂さの一しづくとて生れたる吾
子なればなほいとしとぞ思ふ
片言も得云はぬ吾子のさみしさは何にか
あらむいゆき抱かましを

夫との軋轢、自分への悔恨、将来への不安が渦巻いて喜志子に迫ってくる。しかし、一方では自分がおなかを痛めた子どもの成長を目の当たりにする。「あとかたもなくきえゆく愁」ということばはたしかに真実なのだろう。喜志子の作品の真っ当さは、そういいながら

またさまざまなことを反芻するところにあるだろう。その意味において、たえず成長しようという意思を孕んでいるのである。

そのような喜志子を傍らに、牧水はひたすら自分ひとりの世界をすすんでゆく。

妻や子をかなしむ心われと身をかなしむ
こころ二つながら燃ゆ　（『秋風の歌』）

貧しさに妻のこころのおのづから険しく
なるを見て居るこころ　（『砂丘』）

めづらしく妻をいとしく子をいとしくおもはるる日の昼顔の花　（『白梅集』）

おだやかに妻にものいふやすらけきこころをわれの持たぬものかも（『渓谷集』）

妻が眼を盗みて飲める酒なれば惶て飲み
噎せ鼻ゆこぼしつ　（『黒松』）

牧水の全作品を読んでも、妻の歌は限られている。友や子どもを対象にした作品よりもずっと少ない。おそらく妻がどのように思っていたか、本当のところ理解していなかったのではないか。

二首目のように、相手の険しさを貧しさが要因だと思っている。欲しているのが実は牧水の理解であり、また喜志子の自立であることが分かっていない。自分の行動が相手にどのような抑圧になっているかは見えていない。

三首目の初句など、いかに牧水が喜志子に気を遣っていないかの証拠のような作品である。牧水は自己の問題が大きかったのだろう。その解決のための行動が妻の犠牲のうえに成立っていることは毛頭にも脳裏に浮かんでいない。男性優位の近代文学の見逃してはならない問題点といってよい。夏目漱石も志賀直哉にも似たアポリアが存在している。いずれも自我の拡張は自己の範囲に限られている。その自我の拡張により、妻がどのようになるかはまったく考慮されていない。牧水もそういう近代の男の典型的タイプということができるだろう。

牧水の母を迎えて

晩年、妻は最後に引いたような歌になる。過度の飲酒を監視する妻になってしまう。対等関係の妻でなくいわば母親役としての妻になるのだ。

牧水の家庭での意識は喜志子が夢見たものと隔絶していたといってよい。喜志子が脱却をはかった地方の古さをまったく脱ぎ捨てていなかった。もしかしたら、むしろ信濃より日向の方が、頑迷固陋だったのかもしれない。そういう古さは牧水の根底のところに残っている。にもかかわらず喜志子の牧水への思いは一途である。そこがかなしいところだ。

第三歌集『筑摩野』から引いてみる

酒沸すとわが立てば子も子の父も火をかこむなりたのしき夜よ

吾命に耐へよと強ふるひとすぢの重くるしさは君にしあるかな

さびしとて妻子に謀る事ならずいでて歩めば澄むといふこころ

汝が夫は家にはおくな旅にあらば命光るとひとの言へども

いち早く食べんと言ひし田楽の木の芽も萌えぬとく帰りませ

たのしみて夕餉の膳をまつ夫のこころ見ゆるに早や仕度せむ

忙しくともせめて夫の着るものは我手もて縫はん心入れつつ

かしこみて物書く夫におそるおそる茶を汲みなどす春の日中を

形にそふ影とし吾は生くるなりいよよかがやけ君の命の

『筑　摩　野』

みな心に沁みるような作品ではないか。喜志子のつらさをわかりながら、短歌はこのような場面になると、より力をもつ。

たとえいろいろなことがあっても、一首目のような温かい家庭は、一方で二首目の「耐へよ」という力とに対抗関係のなかで存在する。しかも、男は唐突に旅に出てしまう。後世の私たちは牧水の旅の歌を愛唱し、その韻律に酔う。しかしその作品の背後に、牧水の苦しさがあり、また見送っている喜志子の姿があることは、あまり想像することができない。牧水は自分のさびしさを妻子とけっして共有しようとしなかったのだ。

そして世間は「旅にあらば命光る」という。ひとりの人間としての喜志子はどうなのだろう。だれがきちんと考えてくれているのだろうか。喜志子がそう思うのも当然であろう。そう思いながら五首目以下の気持ちも隠さない。徹底的に男的なるものに対決できないのである。そこがいかにも喜志子らしい。

ジェンダー論からいえば、それは喜志子の限界かもしれない。しかし短歌からいえば、この狭間が喜志子の歌のおもしろさであり、読者を感動させるところなのである。つまり矛盾をそのまま引き受け、その葛藤を三十一音に定着させているからだ。

それは牧水という重しとの関係が作品に力を与えているといいかえてもよいだろう。文学というものはつねにそうかもしれない。自分の前に聳えている分厚い壁をどう乗り越えるか。そのとき文学は大きな、強力な武器になる。

短歌は近代の女性にとって手にはいりやすい大事な武器のひとつだった。喜志子だけでない。金田千鶴、今井邦子、三ヶ島葭子、原阿佐緒、潮みどり。みな短歌という手段によって健気に戦った女性といえるだろう。

形にそふ影とし念じうつそ身を我はや君にささげ来にしを

うてばひびくいのちのしらべしらべあひて世にありがたき二人なりしを

昭和三年九月十七日に牧水は亡くなる。引用した作品は彼女のかなしい挽歌である。「形にそふ影」の意識。そこを喜志子はどうしても突破できなかった。

皮肉なことに喜志子は、牧水死後それほど目立つべき作品を残していない。おそらく重しがとれたことと、作品への意欲ということはどこか反比例するのであろう。

【筆者プロフィール】昭和十九年、東京生れ。慶應義塾大学経済学部卒。講談社の編集者として岩田正、馬場あき子夫妻に出会い、「かりん」創刊に参画。現在、「かりん」編集委員。作歌とともに優れた批評活動を展開している。

『耳の伝説』『家長』『太郎坂』『怪鳥の尾』『液状化』等の歌集のほかに、評論集『批評への意志』『鑑賞現代短歌6・近藤芳美』『宮柊二とその時代』『転形期と批評』等がある。第五歌集『本所両国』で第五回「若山牧水賞」を受賞。昨年の第五十一回沼津牧水祭・短歌大会講師。本会会員。

「日本ほろよい学会　宇都宮大会」に参加して

小出和夫
（沼津牧水会元事務局長）

台風の接近が天気予報で報じられていた平成十六年十月八日(金)、本会の酒好きな会員が、雨の降り出した午後一時、沼津駅に集合した。林茂樹、金子安夫、飛澤浩四郎、北村正昭、三宅芳則の諸氏と小出の六名。石川錬治郎前秋田市長の誘いを受けての「日本ほろよい学会」への参加である。

平成七年十月、秋田市千秋公園に建立された牧水歌碑の除幕式に林理事長が出席したのが石川錬治郎氏とのご縁の始まりである。同十年に沼津で開催した「牧水顕彰全国大会」には秋田市長として出席してくださり、翌十一年秋田市で開催された「全国大会」には、沼津からも大勢で参加させていただいた。その大会をきっかけに設立されたという「日本ほろよい学会」は毎年開かれているそうで、林理事長は何回か参加しているとのこと。

さて、雨模様の中、沼津駅を出発。三島で保坂輝夫氏が合流。新幹線で東京へ。東北新幹線に乗り換え、午後三時三十七分宇都宮駅に到着した。

先ずは宿舎の「ホテルニューイタヤ」に荷物を置くこととする。駅から歩いて行ける距離なので傘をさして歩き出す。

「日本ほろよい学会」の会場「アピア」には、ホテルからタクシーで十分ほど。風が吹き出して、雨も強くなり始めた。「アピア」に着くと、玄関には大会の大きな看板があり、想像以上の人で受付はごったがえしていた。

受付でもらった式次第を開いてみると、何か少しおかしい。二階の「探求の部」と三階の「実践の部」に分かれているが、ほとんど同時刻の開会になっている。どのようにやるのか理解できず、不審に思いながら二階の会場へ入る。

延岡の川並俊一さんや田丸眞さん、東京の田原大三さん等、顔なじみの牧水ファンの方々も来られていて、一年間のご無沙汰の挨拶を交わした。

会場を見回わすと、前半分は椅子が並べてあり、後ろ半分には丸テーブル、そして壁際には、日本酒が酒造メーカーの看板を出してずらりと並んでいる。開始時間になると、後ろの丸テーブルに移動してくれとのこと。先ず乾杯から会が始まるようだ。ぞろぞろと酒のある丸テーブルに移動した。

そうなると酒好きな面々の集まりである。用意された小さな紙コップにどんどん酒を注ぎ、注ぐとすぐに飲み始める人も出てきて、賑やかになる。前方での話がほとんど聞こえなくなってしまった。佐佐木幸綱会長の話もよく聞き取れない。

栃木県酒造組合と秋田県酒造組合から各々三十数社が出展しており、自慢の酒を提供してくれている。では、我々もと手をのばす。最初はゆっくり味わって飲み、片手のコップには用意してあったピッチャーの水を入れて口をすすぎ、次々といろいろな銘柄の酒を味わっていたが、暫くするうちに、いつの間にか両手のコップが酒になっていて、どれもおいしいとしかわからなくなってきた。

沼津からの参加者（左から 北村、飛澤、保坂、林、金子、三宅、小出）

丸テーブルを囲んで、初対面同士が、昔からの知人のように「〇〇酒造の△△銘柄が口当たりがよい」とか、「こくがある」とか情報を交換し合っている。

ところで、気になっていた会場が二階と三階に分かれている理由は、参加者は千名以内の予定が、千数百名に達したためで、急遽三階にも会場を設けたとのこと。それならばと、ほろよい加減で三階へ行って見る。三階会場も二階と同じような仕様になっていた。早速頂戴しよう。口をそそいで各銘柄を一つ一つじっくり味わおう。まずはピッチャーの水をコップに入れて、ぐいと一息に飲んだ。なんだ、こりゃ！　酒ではないか。周りの方に聞いてみると、乾杯の時の樽酒をピッチャーに入れて各テーブルに置いてあるのだそうだ。これではまた二階のときと同じこと。どの酒もうまいということになってしまった。アトラクションは、津軽三味線が演奏されていて、日本酒にぴったりの雰囲気だ。

しこたま飲んでから気が付いたのだが、つまみがほとんど無い。宇都宮なので名物の餃子はと、探してみたが、もう空になっていた。しばらく飲んでから二階に戻って見ると、こちらはギターの演奏中である。これまた素敵なムードである。

午後九時近くになり、中締めがあって、三三五五帰る人が出てきた。二次会を別の会場で行うという。シャトルバスが出るそうだ。うまい酒に酔いしれていたが、そうだ、台風はどうなったかな、雨はどうかなと気がかりになった。外は相当強い風雨になっていて、酔いが少し醒めてきた。

二次会は林理事長と金子理事にお任せして、ホテルへ。ホテルに戻ってはみたものの、どうも腹が落ち着かない。酒はたっぷり飲んだのだが、ほとんど食べていないことに気がついた。傘が役に立たないほどの強い風雨のなかを、フロントで聞いた近所の餃子屋へ繰り出した。先ずは一杯と、

石川錬治郎前秋田市長（右から３人目）と川並俊一若山牧水延岡顕彰会会長（右から２人目）を囲んで酒を酌み交わす沼津からの参加者

本日はじめてのビールで喉を潤し、餃子にとりついた。さすがに本場。なかなか美味しい。二皿目の餃子やラーメンを注文して、やっと腹も落ち着いたので帰って寝ることとした。

翌朝、やはり風雨が強い。台風は関東に向かっているとのこと。この分では新幹線が止まりそうなので予定を早めて帰ることにする。朝食会場に行くと、仲間が皆来ていた。前夜あれほど飲んだので、食欲は無いかと思いきや、なんと皆食欲旺盛である。良い酒を良い雰囲気で飲むと二日酔いにはならないということだろう。

午前八時にホテルを出発した。宇都宮駅では丁度臨時列車が来たのでやれうれしやと乗り込んだ。一足早く出発した保坂氏から携帯電話があり、東海道新幹線は小田原でストップしているとのこと。我々も気が気ではない。しかし、大した遅れも無く東京駅に着くと、いい具合に「こだま」が間もなく出るらしい。これに乗らないと次は何時に出るかわからない。急ぎ乗車した。幸いにもこれも大した遅れも無く三島駅に到着する。

台風の襲来を気にしながらの「日本ほろよい学会　宇都宮大会」への参加だったが、いい記念となった。

千数百名の人を集め、あれだけ多数の酒造メーカーが美味しい酒を提供する、この会の「力」には心から感服した。おいしいお酒をたっぷり飲んで、たいへん気持のよい愉しい集いだった。運営に当られた方々に深く感謝する次第である。

第51回

沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月三十一日(日) 午前十一時
沼津市若山牧水記念館

第五十一回沼津牧水祭・碑前祭は、当初予定していた十月十七日が沼津市長選挙の告示日となったため、二週間遅らせての開催となった。

当日は悪天候との予報が数日前から出されていたため、会場を牧水記念館に変更した。前日、記念館のラウンジに養生シートを敷き詰め、その上にゴザを敷いて会場の設営を行った。

こうして迎えた当日であったが、予報が外れ、朝から気持ちのよい秋晴れとなった。牧水記念館での式典の開始に先立ち、榎本篁子当館館長による歌碑への献花、献酒が行われた。

定刻の午前十一時、市長代理の良知芳和助役、工藤達朗教育長、鈴木秀郷市議会議長、曳田卓文教消防委員長、同委員会委員ほか市議会議員の方々、そして、宮崎県東郷町都甲欣一教育長ほか東郷町教育委員会の方々、前秋田市長の石川錬治郎氏、東京牧水会の和田昱二会長、田原大三事務局長、横須賀市の青木栄治氏、石巻市の千田美恵子氏ほか遠方からも多くの皆様が参加してくださり、「碑前祭」の式典がにぎやかに行われた。

林理事長の挨拶、良知助役と工藤教育長の祝辞、榎本館長の挨拶、岳心流沼津愛吟国風会による牧水短歌の詩吟朗詠につづき、「中学生短歌コンクール」の特選入賞者の表彰式が実施された。緊張しながらも晴れがましい中学生の表情が印象的であった。

「牧水のうたを歌う会」の合唱は、美しいハーモニーが会場のすみずみに響き、屋外とはまた違った良さも感じられた。

正午、良知助役、鈴木市議会議長、都甲東郷町教育長、石川錬治郎氏、榎本館長によって樽酒の鏡が開かれ、鈴木議長の乾杯で、「芝酒盛」が始まった。会場のあちこちに輪ができ、おでんと刺身、寿司を肴に「清酒牧水」が酌み交わされ、楽しく気持ちよく会は進んでいった。

庭に置かれた縁台や芝生の上で歓談する人たちも多く、用意したおでんが早々と品切れとなるほどだった。前庭で演奏する「ようそろ」の力強い太鼓の響きが流れ出すと、屋内にいた人たちも外へ出て来て、しばし聞き入った。

名残を惜しみながら、午後二時閉会となった。例年とは異なる形の「碑前祭」ではあったが、それぞれが満足し、和やかで充実したときを過ごすことができた。

短歌大会

十月三日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館

沼津牧水祭・短歌大会は、「かりん」編集委員の小高賢先生をお招きし、十月三日（日）沼津市立図書館四階視聴覚ホールで開かれた。

午前中は『老いの歌のおもしろさ』と題した講演があり、例歌を多く挙げながら、かつてなかった老いの時代をどう楽しむかと展開、女歌には老いがないとの指摘が面白かった。女は年をとっても色気がある。対して男は老いに徹してといった論に説得性があった。かつては老いる前に死んでしまって、老いは話題にならなかったと言われると、そうだなあと妙に納得したりした。

午後は、投稿歌一九〇首の中から出席者の作品約一〇〇首について、懇切な、しかしいささか辛口な批評を開陳された。

以下、選者小高先生の選ばれた作品（選者賞）と互選入選歌を紹介する。

【選者賞】

牧水賞一席　静岡市　米山三代子
延命の処置はいらぬと医師に告げまなこ合ふ子に言葉押へぬ
選評　場面がリアルに立ち上がって来る。

牧水賞二席　富士市　宮川　良子
一本の杭もろともに夕焼けて塑像のごとく動かぬ河鵜
選評　描写ができている。状況が見えてくる。

牧水賞三席　清水町　前田　鐵江
ジャンプ傘ばしつと開き土砂降りを出で来ぬうしろは振り向くまいぞ
選評　快い勢いがよい。気持ちがよくわかる。

【互選賞】

市長賞　沼津市　長野　堯子
降ればぬれ吹けばふかれて案山子たつ形見着せれば父となりけり

市議会議長賞　御殿場市　土屋さち子
洗へども土落ちぬ爪を短かめに切りて歌会の一員となる

教育長賞　沼津市　川口　和子
雨の夜のコーヒーショップ灯りいて熱帯魚のごと動く人かげ

商工会議所会頭賞　富士市　宮川　良子
一本の杭もろともに夕焼けて塑像のごとく動かぬ河鵜

観光協会会長賞　沼津市　林　和
本棚より色褪せし名刺ひらり落ち遠きひとりがふいに現る

沼津朝日新聞社賞　沼津市　宮本千鶴子
亡き夫の手捲の時計わが腕に生きよ生きよと秒針きざむ

マルサン書店賞　沼津市　小池　孝
産院の貧乏ゆすり落ち着かずもうすぐパパの若者ひとり

小高先生は、「全体的な印象として、よい歌が多かった。傾向として、まとめようという意識が強い感じがした。説明しないこと。特に結句で説明した歌が多いのに気付いた。短歌は一五〇〇年の歴史を持つ。その伝統の上にその人らしい新しさが加わらなければならない。」などと話された。示唆されること多々あった。例えば「比喩はすれすれにわかるもの」とは、言い得て妙なるものがあった。

（須永秀生）

第17回 雛の歌会

当日は寒い日になった。夜には霙から雪になって、先生を三島駅にお送りしての帰りは吹きつける雪の中を走ったほどだった。

「雛の歌会」も一七回を数え、今回から詠草料を負担してもらうことにしたが、一二二首の作品が寄せられた。参会者が多数となり、牧水記念館の和室では狭いため、急遽「沼津倶楽部」を借用することになった。講師の栗木京子先生の人気の高さかも知れない。

栗木京子先生は『塔』同人で、第八回若山牧水賞の受賞者。早めにお出でいただいて何か所かご案内しようとしたが、何しろ寒い。「雪空に栗木京子の衝く鐘のおもおもと響き乗運寺寒し」は当日の私の感慨。

講評は、提出作品を出席者のものに限って語ってもらうのはいつもと同じ。およそ八〇首を二時間半にわたって熱っぽく語られた。

終ってから、参会者は一様によいお話だったと語っていた。作品を受け止め、作者の志向にそって、更にそれを伸ばす方向での批評であったため、内容的には厳しいものがあったが、好意的に受け止められたであろう。

栗木京子選一〇首

母逝きて十日の街に雨やまず形見の傘の
藤色ひらく　森田小夜子

「ひこうきがいまくものうえとんでるよ」文
字の大きなはがき那覇より　三井節子

いろあせし袋ごと截れば大寒のデコポン
柑は片手に重し　石田直江

お手玉を高くあげれば亡き母の笑顔がス
トンと両手にもどる　川辺典代

見守れるわれの心を打ち連れてハングラ
イダー宙に翔び立つ　田中淑子

ビルの屋根に届くと見えて上弦の月あり
ふいに人の懐かし　小林敦子

合唱の声ゆつくりと集めては返せり指揮
するひとの双手は　小林暁子

沖つ辺にいまだ夕陽の名残りあり冷えび
えと髪を風にさらせば　菅沼あさ子

電話線手繰り寄せたし幾たびか受話器の
向うに母の咳きこむ　中村厚子

三春とふ君が在所をたづねばやうめもも
桜の咲きそろふころ　河辺龍二郎

（須永秀生）

文　化　講　座

「青春の牧水」

日 時　平成16年6月20日(日) 午後2時～4時
講 師　田村志津枝氏

「沼津の文学風土」

日 時　平成16年10月30日(土) 午後1時半～3時
講 師　関口昌男氏

「書　道　講　座」

日 時　平成16年4月～平成17年3月
毎月第3火曜日 午後1時～3時
講 師　成田真洞氏

「家紋の魅力 2」

日 時　平成16年9月4日(土)
午後1時半～3時半
講 師　八十濱俊一氏

「牧水記念館短歌会」

日 時　平成16年4月～平成17年3月
毎月第2土曜日 午後1時半～3時半
講 師　須永秀生氏

「初心者のための短歌講座」

日 時　平成16年4月～平成17年3月
毎月第2土曜日 午前10時～12時
講 師　須永秀生氏

サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

第１回　古楽コンサートシリーズ14
『バロック・オーボエ、バロック・ヴァイオリン、チェンバロの夕べ』

日　時：平成16年５月29日(土)　午後６時45分
出　演：尾﨑温子（バロック・オーボエ）
　　桐山建志（バロック・ヴァイオリン）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来場者：110人

第２回　『木管楽器とピアノによる
モーツァルト　その周辺』

日　時：平成16年７月24日(土)　午後６時45分
出　演：仲戸川智隆(フルート)
　　宮村和宏(オーボエ)
　　梅原　圭（ピアノ）
来場者：84人

第３回　『アイルランド　人・酒・音』

日　時：平成16年10月23日(土)　午後６時30分
出　演：守安　功(フルート、ホイッスル)
　　守安雅子(コンサーティーナ
　　アイリッシュハープ)
来場者：58人

第４回　古楽コンサートシリーズ15
『フォルテピアノとチェンバロの出会い』

日　時：平成16年11月19日(金)　午後６時45分
出　演：岩村かおる（フォルテピアノ）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来場者：105人

第５回　古楽コンサートシリーズ16
『バロック音楽の楽しみ
～イタリア、スペインの旅～』

日　時：平成17年3月12日(土)　午後６時45分
出　演：古橋潤一（リコーダー、ドルツィアン）
　　石和美和（リコーダー）
　　丹澤広樹（バロック・ヴァイオリン）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来場者：125人

平成16年度事業報告

総　会（第18回）　平成16年 5月14日(金) 午後6時～7時
理事会　第1回（通算 96回）平成16年 4月16日(金) 午後6時～7時30分
　　第2回（通算 97回）平成16年 5月14日(金) 午後7時10分
　　第3回（通算 98回）平成16年 8月27日(金) 午後6時～7時
　　第4回（通算 99回）平成16年12月 3日(金) 午後6時～7時
　　第5回（通算100回）平成17年 3月 1日(火) 午後6時～7時30分

会報発行
　第17号発行　平成16年5月20日
館報発行
　第33号発行　平成16年9月25日
　第34号発行　平成17年3月15日

1　調査研究事業
(1) 第5回「百草園牧水碑前祭」（東京牧水会主催）
　日　時：平成16年8月22日(日)
　会　場：東京都日野市百草園　牧水歌碑前　祝電打電
(2) 第54回「牧水祭」（宮崎県東郷町主催）
　日　時：平成16年9月17日(金)
　会　場：牧水記念館裏牧水歌碑前及び町総合文化センター
　　祝電打電
(3) 第6回「日本ほろよい学会」宇都宮大会
　日　時：平成16年10月8日(金)
　会　場：宇都宮市戸祭元町「アピア」
　参加者：林　茂樹、金子安夫、保坂輝夫、北村正昭、
　　小出和夫、飛澤浩四郎、三宅芳則
(4) 第9回 若山牧水賞授賞式（若山牧水賞運営委員会主催）
　日　時：平成17年1月28日(金)～29日(土)
　会　場：宮崎市 宮崎観光ホテル
　　（受賞者記念講演会：東郷町総合文化センター）
　受賞者：米川千嘉子氏『滝と流星』
　参加者：林 茂樹理事長

2　第51回沼津牧水祭の運営
(1) 短歌大会
　日　時：平成16年10月3日(日) 午前10時30分～午後4時
　会　場：沼津市立図書館　視聴覚ホール
　講　師：小高　賢氏（「かりん」第5回若山牧水賞受賞者）
　応　募：190首
　参加者：106人
(2) 碑前祭・芝酒盛
　日　時：平成16年10月31日(日) 午前11時～午後2時
　会　場：沼津市若山牧水記念館
　参加者：約 220人

3　文化講演会及び文学講座等の開催
(1) 文化講座
「青春の牧水」
　日　時：平成16年 6月20日(日) 午後2時～午後4時
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：田村志津枝氏
　参加者：41人
「家紋の魅力2」
　日　時：平成16年9月4日(土) 午後1時30分～午後3時30分
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：八十濱俊一氏
　参加者：41人
「沼津の文学風土」
　日　時：平成16年10月30日(土) 午後1時30分～午後3時
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：関口昌男氏
　参加者：23人
(2) 第17回「雛の歌会」
　日　時：平成17年2月26日(土) 午後1時30分～午後3時45分
　会　場：沼津倶楽部
　講　師：栗木京子氏（「塔」、第8回若山牧水賞受賞者）
　応　募：122首
　参加者：83人
(3) 初心者のための短歌講座
　日　時：平成16年4月～平成17年3月
　　毎月第2土曜日 午前10時～12時
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：須永秀生理事
　参加者：延べ 204人
(4) 牧水記念館短歌会
　日　時：平成16年4月～平成17年3月
　　毎月第2土曜日 午後1時30分～3時30分
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：須永秀生氏
　参加者：延べ 151人
(5) 書道講座
　日　時：平成16年4月～平成17年3月
　　毎月第3火曜日 午後1時～3時
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：成田真洞氏
　参加者：延べ 137人
(6) 第15回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
　募　集：平成16年4月27日(火)～9月10日(金)
　応　募：1,315 首（15校 1,315人）
　入　選：50首（50人）
　選　者：青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春、
　　曽根耕一
　表　彰：平成16年10月31日(日)
　沼津牧水祭・碑前祭（沼津市若山牧水記念館で実施）にて

4　その他の事業
音楽イベント
第1回　古楽コンサートシリーズ14
　『バロックオーボエ、バロックヴァイオリン、
　チェンバロの夕べ』
　日　時：平成16年5月29日(土) 午後6時45分
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　演：尾崎温子（バロックオーボエ）、
　　桐山建志（バロックヴァイオリン）、
　　杉山佳代（チェンバロ）
　来場者：110人
第2回　『木管楽器とピアノによるモーツアルトその周辺』
　日　時：平成16年7月24日(土) 午後6時45分
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　演：仲戸川智隆（フルート）、
　　宮村和宏（オーボエ）、
　　梅原圭（ピアノ）
　来場者：84人
第3回　『アイルランド　人・酒・音』
　日　時：平成16年10月23日(土) 午後6時30分
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　演：守安功（フルート、ホイッスル）、
　　守安雅子（コンサーティナ、アイリッシュハープ）
　来場者：58人
第4回　古楽コンサートシリーズ15
　『フォルテピアノとチェンバロの出会い』
　日　時：平成16年11月19日(金) 午後6時45分
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　演：岩村かおる（フォルテピアノ）、
　　杉山佳代（チェンバロ）
　来場者：105人
第5回　古楽コンサートシリーズ16
　『バロック音楽の楽しみ』
　日　時：平成17年3月12日(土) 午後6時45分
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　演：古橋潤一（リコーダー　ドルツィアン）、
　　石和美和（リコーダー）、
　　丹澤広樹（バロックヴァイオリン）、
　　杉山佳代（チェンバロ）
　来場者：125人

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条　この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条　この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条　この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条　この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究
(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
(3) 文学講演会及び文学講座の開催
(4) 文学に関する各種出版物の刊行
(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
(6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条　この法人の会員は、次のとおりとする。

(1) 正会員　この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
(2) 賛助会員　この法人の事業を援助する個人又は法人
(3) 名誉会員　この法人に特に功労のあった者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条　会員になろうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条　この法人の入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員　一〇、〇〇〇円
(2) 賛助会員　三〇、〇〇〇円以上

この法人の会費は、次のとおりとする。

(1) 正会員　年額　五、〇〇〇円
(2) 賛助会員　年額　一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉林　茂樹
〈副理事長〉杉山　光男　須永　英男
〈理事〉浅井　治　保坂　輝夫　田中　和男　川口　和子　金子　安夫
四方　一弥　八十濱俊一　杉山　芳春　長澤　靖夫
〈監事〉杉山　重義　鈴木　弘行
〈事務局長〉金子　安夫　〈事務〉大島　葉子　西川　滋子　伊藤早智子

編集後記

本年四月一日付で社団法人沼津牧水会事務局長に就任しました。

思い起しますと、四十年ほど前から沼津牧水祭・碑前祭に関わってまいりました。このたび、事務局長を受けるに当たり、多少の戸惑いを覚えましたが、林理事長をはじめ役員並びに事務局のご協力をいただいて、会の活性化に努めたいと思っております。皆様の御指導、御鞭撻をよろしくお願いいたします。

昨年の「沼津牧水祭・短歌大会」の講師小高賢先生から玉稿を頂戴いたしました。

「碑前祭・芝酒盛」は、久しぶりに会場を牧水記念館に移しての開催でしたが、宮崎県東郷町や秋田市、石巻市等々遠来のお客様も集い盛会でした。

「日本ほろよい学会・宇都宮大会」は、美味しいお酒を酌み交わし、幸せな一夜でした。台風接近の報に、急ぎ帰沼し、宇都宮市内の見学もできず残念でした。次回はゆっくりと「ほろよい」の余韻を楽しみたいものです。小出和夫元事務局長に参加の報告をしていただきました。（金子安夫）

■会報「幾山河」第18号　■平成17年5月15日発行　■編集・発行 社団法人 沼津牧水会　■〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11
TEL・FAX〈055〉962-0424　E-mail：bokusui@thn.ne.jp　URL：http://web.thn.jp/bokusui/　■印刷 ㈱耕文社